

## 将来の電波の世界（92・3・16）

高木 盛久（昭15・文乙）

ご紹介頂きました高木でございます。ここに入って来ましたら、小菊のママがいるので、驚きました。実は小菊のママさんと私とは、いわば同級生でございます。私が三高に入りました時に、「若草」の店が出来まして、本当にきれいなあの時の娘さんがこのママで、私なんか気が弱くて、充分に顔を見たこともなく、専ら胸の方ばかり見ていた様な記憶があります。それがですね、何年かぶりに南座で会いまして、それから又、何年かぶりで東京で店をやっていると通ったのが、小菊のママです。ずい分長い間健闘されて、この間、引退されましたが、こんな所で目にかかるとは。やはり女性をまず先に立てたいのでこういう話を申しました。

多田君はホッケーと一緒にやって来た仲間なので、勿論よく知ってますが、代られた幹事が吉兼さんでいらっしやる。実は私も不勉強で、その時にはじめて吉兼さんが多摩ケーブルビジョンに関係しておられることを知りました。すでに六月に免許が下りています。この会社は大変いい

エリアを持っています。世帯数は大体八万五千位ですか、あれだけかたまつた集団のマンションですから、恐らく都市型テレビとしては、理想的な形になるだろうと思います。中々いい所に目をつけられたものです。所で、私の今日の課題は、これからの21世紀に入った、テレビを中心とするいわゆる電波メディアがどうなつてゆくかということについてですが、いろんな見方があります。一応資料は用意していますが、まずその前に、私がなぜテレビ界に入ったかという所からお話申し上げたい。

昭和二八年に民放テレビ第一号として日本テレビが開局しました。その前は……ご存知の通り、日本テレビは読売系です。で従つて私も読売新聞から来たんじゃないかと、度々聞かれましたが、実は私は、むしろ毎日系の夕刊紙におりました。大阪の新大阪新聞という、その当時は横型で非常に特異な新聞でした。そこから集立つたのが、サトウサンペイ、あの漫画家の。それから檀一雄。井上靖さんも、あの時は毎日新聞でしたが、書いて頂きました。事業も闘牛なんていうことを小谷さんという人が思いつきまして、結局失敗したんですが、その間の様子を、井上靖さんが「闘牛」という小説に書かれて、それで芥川賞をとられた。そういう風な、その当時は非常に文化的な大阪では珍らしい新聞社。そこに、たまたま縁があつて入りました。そして八年間勤めましたが、いわゆる終戦後なので進駐軍の中に、新聞課というのがありました。皆さんご存知ないかも知れませんが、インボーデンという少佐、後に中佐になりましたが、彼の指揮下で当

時の新聞は全部、検閲を受けていました。完全な進駐軍管理下にあったんです。ところがそのインボードンの考え方はですね、日本がこういう風に戦争に突入したのは、いわゆるローカルペーパーの力が不足し、中央新聞、全国紙が中心になっていた。それが世論をひっぱり戦争が起ったんだと、戦争を起こらした要因の一つにしていた。従って、これからは日本もローカルペーパー、つまり地方紙に力を入れるべきである、地方のニュースを出来るだけ伝えるべきであるという風に指導していました。彼自身が実はカリフォルニアで小さな新聞を経営していたんです。その関係で地方紙に対して、力を入れて、昭和二七年にローカルペーパーの連中をアメリカへ行かせてローカルペーパーを見て、勉強して来いというんで、何かややこしい試験みたいなの、させられました。いい加減にやっただけですけども、とにかく一応パスしました。ローカルペーパーの記者だけ。ところが朝日、毎日、読売、共同、時事、そういう連中も、ローカルペーパーだけで行かせるのも……。というのは当時日本の新聞記者のアメリカでの取材は禁止されましたから、戦後、初めて行く新聞記者の団体ということになった。そこで彼らも絶対、我々を行かせろと言って、強引にがんばり、ローカルペーパーだけということからはみ出し、結局全国紙の連中も入って来て総勢十二人という形で行きました。

まず最初にコロンビア大学のプレス・インスティテュートで勉強させられ、その後、各地方紙にそれぞれ分散させられまして、私はビンガムトンプレスというニューヨーク州にあります、丁

度、あの時はI・B・Mの工場があつたりなんかした町の新聞。その後、インディアナポリスの新聞社に移り、夫々の社の新聞記者と一緒に、いろんな所を廻りました。記事は絶対送ってはいけない、とにかく勉強しろということで、あちらの記者の取材の仕方、編集のやり方などの勉強をさせられました。そして見たんですが、とにかくコミュニティのありかたが全く違う。アメリカの場合は、やはりタウン、極端な場合はビレイジ、そういうものが中心で、いろんなニュースでもそういう、小さなコミュニティ、従って、例えばどこかの街の新聞のトップは、決して、連邦政府や議会、つまり、ワシントンのニュースではなくて、むしろその州の例えば議会の記事、あるいは町の議会の記事、そういうものがトップ。そして誰と誰とが結婚したとか、婚約したとか、そういう様な社交記事などが中心になっている。

私は、ローカルで勉強しろと言われても、このように日本と全くコミュニティのあり方がちがう。これでは余り勉強にならないと実感として感じました。やっぱり日本の場合、何と云つてカリフォルニア州の大きさ位しかありませんし、向うのカウンティは、丁度日本の県の大きさ、そういう形の中で地方紙の勉強をしろと言つたって、あまり役に立たない、効果がないと、私、自分勝手に判断しました。しかし、折角勉強しろといわれているのだから、学ぶべきものは学ぼうという気持ちでしたが、たまたま行ったついでにということ三大ネットワークのABC、CBS、NBC等の放送局も見学しました。

私はネットワークの番組は見ておりました。ホテルです。勿論、黒白の、それも受像機の前に、大きなレンズが置いてありまして、レンズで後の方からもよく見られるという、そういう時だったんです。ところがたまたまRCAの実験研究所に参りまして、そこでカラーの実験をやっているのを見ました。それは私にとっては一つのショックでした。本当にきれいに見えました。初めてなんで、恐らくそういう風に見えたんだろうと思います。今のカラーから見れば、ずっと劣っていたとは思いますが、それを見まして、私はこれからはテレビの時代だと真実思いました。そこで何とかテレビに入れないものかと思っておりましたら、あと一年足らずに、日本テレビが開局するという話を聞きました。いろんな手を廻して入る努力をしました。丁度、大阪支社を日本テレビが作るというんです。あくまで営業活動をする大阪支社ですが、私自身も、向うへ行つて新聞記者として、一応勉強したんですが、テレビということになると、向うのテレビのコマーシャルを見て、やはり広告としてのインパクトの強いのはテレビが最大である。これからは広告もテレビの時代になる。そう自ら決心をして、大阪の営業を引き受けることになった次第です。それ以来、大阪支社開局の時から、営業を中心にずーとやって来ました。従つて東京本社に移つてからも余り制作の方には、一応、制作本部長なんかもやりましたけれども、あまり直接にタッチすることは少なく、営業、ネットワークに専心して来ました。今でもネットワークという問題は、非常に大きな問題ですが、この確立を長年担当しました。話がバラバラになりますが、日

本の郵政省の指導というのは、今とは全くちがひが有つて、要するに、東京に二局があつてもですね、大阪はまず一局。それから今度は三局になつても、ローカルは二局、そういう形、しかしスポンサー側は、よりマーケットを拡げたい。従つて東京や大阪で制作したものを出来るだけ地方に送りたい、そういう要望をします。そして一人当り幾らのコストにつくかという計算をするものですから、どうしてもネットワークを必要とするわけです。ところが今、言ひました様に、東京が二局あつてもローカルは一局。あるいは三局になつても一局あるいは二局。必ず一つ足りない、あるいは二つ足りない。しかしスポンサー的なマーケット要請があり、と同時にニュース報道というものを考えると、どうしてもそれぞれの地方の拠点が必要。その為にも絶対ネットワークはじめて、全国ニュースというものが放送される可能性が出来る。その為にも絶対ネットワークが必要というわけです。ここで一つ、申し上げたいのは、日本の郵政の方針ですね。マスコミの集中排除原則です。例えば、日本テレビが、大阪の局の株を取得して、人事的に、また経営的に支配することは出来ない。むしろ、新規参入を歓迎する。この原則に従つて既存マスコミは五乃至七%、それ位の株のシェアしか獲得出来ない。しかしその後、それぞれの息のかつたと言ひますか、グミーと言ひますか、そういう形で株を保有し、実際には有名無実になつてますが、とにかく、マスコミの集中排除というのは、その当時、非常に強く打ち出され、今だに、その原則は生きています。そういう關係で、各ローカル局を経営的に、あるいは編成的に完全に

支配するということとは出来ない。それぞれのローカル局が独立局という形で、その独立局とキー局との契約で、番組もニュースも送ったり、送られたりして来ました。その点で、ネットワークというのは非常に重要なのです。今のテレビの隆盛は、そのネットワークの形成によってもたらされたということを理解願いたい。そういう形の中での営業とネットワークをやって参りまして、もう来年で四十周年を迎えます。もう、四十年も経ったかと思うと、感無量の感があります。

話が前後して申し訳ないが、テレビの免許は日本テレビに、一番最初、昭和二十七年にありました。それまでに、NHKとの間で激しくやりとりがありました。吉兼さんなんか、よくご存知だと思いますが、放送を六メガでやるか、七メガでやるか。メガというのは電波の一秒間に振動する数です。技術的には、私は文科ですから技術には弱いんですが、とにかく六メガと七メガということで、NHKは七メガを主張したんです。日本テレビは六メガ。それはですね、日本の電機メーカーの技術は、アメリカの技術水準まで行っていない。だから、アメリカの機械を買うなり、あるいは向うを見習ってやったらいいじゃないか。それともう一つは、六メガでやった方がカラーに移行する時に、七メガよりベターだ。そういった理由で正力松太郎氏が六メガでやるべきと主張し推進したのです。そして結局、七メガ主張のNHKと大論争やりました。はっきり言いますとNHKは民放の発生を基本的に反対したのです。そのためにいろんな所にビラを貼ったり、チラシをまいたりして反対表明を行いました。「民放は売国テレビである」、つまりスポンサー付

である。そういう企業に拘束される様な番組は、ろくなものではない。俗悪番組が出来るに違いない。だから民間放送の誕生は許すべきじゃないという趣旨でした。そしてそんな反対運動と相俟って六メガ、七メガ論争が行われ、結局、電波審議会、これは私共に許可を下した次の日に、解散したんですが、それが日本テレビに第一号の免許を与えるという結論を出してくれました。その次にNHK。所がNHKは、やっぱり準備がよかつたんでしようね。こちらは金集めからやってきましたから大変で、結局NHKの方が約半年先に、開局。日本テレビは六ヶ月遅れの二年八月二八日に開局した次第です。

開局時、我々のエリヤは関東全般です。その関東全般で、NHKが先行したせいで受像機はすでにありましたが、その台数が、確か二千台を欠けてたと思います。それも大型のほとんどRC Aの機械でした。個人家庭で持っているのは非常に少なく、人が集まる様な所が置いたわけです。従って、我々は二千台で一応スタートした。ところが民間放送ですから、スポンサー付でコマーションルを放送せにゃいかん。ところが、スポンサーから見れば、二千台位の受像機では、全くコストに合わない。こつちの方も大安売でもすれば別ですが、やはりこちらもコストかけてますから、それ相応の電波料と制作費を要求せざるを得ません。ことに私は大阪で営業をやっていたわけですが、大阪にはまだ電波が来ない。全く見えない。だから先になったら絶対テレビ媒体は栄えるということを切々と説き訴えて商売したことを思い出します。そのうちに正力さんが、要



するにテレビの宣伝効果は、受像機の台数ではなく、受像機を見ている人間の数によって、測定されるべきであるということを主張、いろんな人が集まる所に、大型受像機を置こうと考えついたのです。そこで四十インチ以上のテレビをRCAから買ひまして、関東エリヤの約二百五十ヶ所に置いたのです。そしてこれはまさに、卵が先か、それこそ鶏が先か、という風なことになるのですが、これを置いたお蔭でワツと人気が出て来たのです。

野球もさることながら、やはり一番私が今でも記憶に残るのは、プロレス放送です。力道山がシャープ兄弟とか、アメリカから来た選手をこてんこてんにやっつけるんですね、これが負けた日本人としてはうれしい限りですよ。そういう点で、とにかくプロレスの時や野球の時の写真が今でもあります。その写真を永久に残したいというんで、私共のホールの壁面に、大きな陶壁にして残してあります。数えたことはないんですが、恐らく一万人近い人々が受像機の前に群つてみていたのです。その人々にやはりコマージュルを見せないといけないので、後ろの方からも見えるように一字が画面一杯のコマージュルを横に動かしてみたり、縦に動かしてみせたものです。テレビをみる人々が段々増える。それに従つてスポンサーもついて来る。そうはいうもののいろいろ苦勞がありました。給料の遅配もありましたし、給料も三回位ダウンしました。

そして、二年目。はじめは私も大阪支社でグラフを作りました。毎月、どれ位受像機台数が伸びているかというグラフです。はじめは大体、百台単位で伸びて行きましたが、一年目の後半位

からは万単位に切りかわりました。その後十万単位という形で、どんどん増え、今の盛況になった次第です。その当時にふりかえりますと、投下される広告料のシェアを一番大きく占拠したのは、印刷媒体、新聞です。それが今から十年位前からテレビがぐーんと抜き、今や完全にテレビのシェアが媒体の中では、一番大きく占めています。この辺でまことしやかに、数字を申し上げた方が信用されると思いますが、この数字は、多摩テレビ資料部というのを使わせて頂きます。

参考までにお聞き願いたいと思いますが、平成三年の総広告費が、五兆七千二百六十一億円、これが総広告費でマスコミ四媒体、つまり新聞・雑誌・ラジオ・テレビと、この四媒体が、今申しました五兆七千二百億円の内、三兆六千五百十億を占めています。その中でテレビが一兆六千七百九十三億、新聞が一兆三千四百四十五億、雑誌が三千八百六十六億、ラジオが二千四百六億となっています。ダイレクトメールとか、屋外看板とか、いわゆるSP広告が後の残りをしめています。この五兆七千二百六十一億円という数字は、いわゆるGNPと較べると、1.3%位だと思えますが、かつては0.8%位だったのが、それだけGNPとの比率ものびて来たわけです。皆さんの方がよくご存知かも知れませんが、日本の今、申しました広告費の総量とGNPとの比率は、大体、日本の防衛予算の比率に匹敵しています。確かに、今の防衛予算も1%を越えています。それからもう一つ、これは理由はないんでしようが、不思議に数値が同じで、パーセンテージも同じで、何年か、並んで伸びて来たのが、パチンコ産業から来る上りです。

この三つはかなりの平行してきたのが、最近になってパチンコの方が、ガンとぬいて来た様です。いずれにせよこういう形でびて来た、これは確かにテレビの持つ強力な媒体力と言いますか、そういうものを皆が評価してくれたせいだと思います。そういう形で来たんですが、近年になりまして皆さん、もうすでにいろいろお聞きになってるでしょうが、ニューメディアの台頭と言いますか、つまり、もう今や地上の時代から、星の時代に移りつつあるということがいえると思います。

この間も三菱が上げたSCCの衛星が故障しまして、しばらくNTSATという星の方に移って、この間に新しく打ち上げたのが成功して、三菱さんも非常に喜んでおられました。まあ、そういう形で星の時代の到来といえそうです。しかしいままでは一つ打ち上げるのに、六百億位かかるんです。つまり非常な金がかかる。しかも最近は保存ベースが十年位にのびたんですが、今までは大体七年しか寿命がないんです。なぜ七年しかもたないか。静止衛星というのは地上三万六千キロの所でとまってるわけです。止まってるというのは、丁度、地球の自転と同じ速度で廻ってるということなのです。だから静止してるわけですね。ところがやはり時間が経ちますとその軌道からはずれるんです。それを中にある気体、ガスですね。そのガスで修正する必要が出て来ます。そして修正して、又、しばらく経つと又、軌道からはずれる。それを又、修正する。そのガスのもつ時間が、大体七年、だから七年経つとガスがなくなるわけですね。それが最近十年

もつ様になったと聞いてますが、いずれにせよ、非常にコスト割高衛星なんです。従って、スペースシャトルが成功しますと、上ったスペースシャトルから、それこそ宇宙遊泳か何かやりながら、ガスが取り代えられます。そうなると今度は、永久に使えるようになるわけですが、そこまで、まだいってません。早くスペースシャトルが成功して、それこそ宇宙基地でも出来て、そこから簡単にやってくれることになりますと、非常に助かると言いますか、ぐっと年数がのびることになります。

参考に申しますと、今、衛星は先刻申し上げたように赤道の真上、三万六千キロの上に止まっているわけです。なぜ、三万六千キロかと言いますと、丁度、その地点が、引力と遠心力との丁度バランスのとれた地点なんだそうです。色々方程式を見せられましたが、全く解りません。三次方程式みたいなもの見せられました。衛星の中で、現在、BS3という衛星が一つ上っております。それにはNHKが二トランスポンダー、JSB、日本放送衛星が、一トランスポンダーを使って放送しています。しかしこれも寿命がくるので大体、一九九七年には、新しいBS4というのが打ち上げられます。これには、トランスポンダーが八つ乗る予定です。それになりますと、NHKは二つ。更にNHKは、も一つよこせと頑張っています。というのは、今ご案内の通りNHKが中心になって、ハイビジョンの実験をやっています。実はハイビジョン推進協会というのが出来まして、我々もその中に入れられ、ハイビジョンで、今、実験放送をやっています。各局、

それぞれ交替に時間を持ち合ってやっております。しかし相当な制作費もかかりますし、それはもう目をつぶって協力してくれというんで、やってるんですが、実は民間放送がねらってますのは、その八トランスポンダー、これは波長が国際的に割り当てられますので、それ以上増やすわけにいかないんです。その八トランスポンダーのうち、東京局、少なくとも東京局ということは、先つき申しました系列ネットワークも含んでの形になるんですが、東京の五つの局に八つのうち五つをよこせと。ところが放送大学が、そこへ割り込もうとしています。従ってこれは、非常に激烈な取り合いが予想されます。ところが郵政はお前達はもうすでに既成のマスコミである。従って、先つき申しましたマスコミの集中排除から見たら、お前達に渡すわけにいかん。しかし何とかして欲しい。こんな具合なので郵政の言うことは、何でもハイハイと聞かなくちゃならんとまあ、吉兼さんが、よく一番ご存知かも知れませんが、とにかく我々はそういう立場にいて、推進協力会にも入りましたし、色々郵政のいうハイヴイジョンの実験をやっています。

しかしNHKや我々が参加してる実験が見られる受像機は全国で、今、三百台位です。特別のハイヴイジョンの受像機ですから、少しは安くなりましたが、四百万から五百万位かかります。(最近四、五十万になったのが出ていますが、あれはいわばエセ受像機だそうです。しかし素人には判りません)。これは星を使わないと送信も受信も出来ない。いままでの受像機では受信出来ないのです。

そこで我々はエキステンデットII (ED II) という高質度・高精度のものを推進すべきだと主張しています。この方式だと星を使っても、地上波でも、今の受像機でED II受像機ほどの高質度は期待出来ないが、その放送を受信出来るのです。そもそも現在のハイヴィジョン、NHKが中心になって開発して来たハイヴィジョンは、ミューズによるものです。しかし今の電波技術はデジタル方式に移行する傾向にあり、アメリカなどは、デジタル・ハイヴィジョンで将来は行くという方針を出しています。デジタルというのは全部信号に直して送るといふ方式で、これが一番鮮度もいい。従っていざそれはデジタル・ハイヴィジョンの時代になるとしても、それまではED IIで行くべきだというわけです。かつてカラーに移行した時に、カラーで放送しても、黒白受像機でも受信が出来ました。従ってカラーで見られなくても、黒白で見た家庭が、当初は非常に多かった。ところが子供達が友達にカラーで見ているのに、うちは黒白だ。早くお父さん買ってくれ、お母さん買ってくれ」とせがむ。そういう形で段々増えていって、もう今や全部カラーになった。それと同様に、今の受像機でもED IIの波をキャッチ出来る。従ってハイヴィジョンでなくED IIで行くべきだというのが我々の論旨です。ED IIの原理を簡単に言いますと、五二五本の走査線は、そのままなんですが、二回なぞる様な形なんです。だから非常に鮮明で、きれいに写るわけです。しかし、ハイヴィジョンにしてもED IIにしても女優なんか、しわが見えて困ると思うんですよ。それだけに化粧法も変ると思っています。

さて、星の話に移りますが、いまはBSという放送衛星とCSといわれる通信衛星の二種類の星が上っています。CSもすでに免許が下りています。これは委託放送と言って、その星を調達するのは別の会社なり、法人であって、それをいわば借りて放送する。それがCSつまり、通信衛星。今年の暮には本放送をはじめと思います。少なくとも三波は出ると思います。そしてその次の段階では六波になります。放送衛星は、八波に限られてるんですが、この通信衛星の方にはも少し、それより波を出しやすい。恐らく三十波位は出る可能性があるんじゃないかと思えます。このように放送衛星があり、通信衛星があり、そしてその画面のすきまを利用して、……すき間というのは、画面と画面のすき間に電波がある。その電波を使ってPCMというFM放送よりも優れている、いい音が出るといふ音声放送が始められています。ただこの受信のためには、やはりパラボラが要るのです。ラジオなのに今までのAM・FMと違って、小さなパラボラが必要なのです。しかも星からの波を受けるので、いまのところ自動車などの移動体ではパラボラがいつも星の方向に向いていなければ、ならないという点で技術開発が到達していかない。果してどこまでのびてゆくか、結局は音楽の質によると思います。先達の感じがします。

次に吉兼さんの関係されておりますCATV。これについては、日本のCATVは、そののびないだろうという風なことを言う人々が多いですが、私は、そうじゃなくて、CATVは意外に伸びる速度が早いだろうと、自分なりに思っています。というのは、やはり人間といいますが、

殊に日本人は、モアチャンネル指向だと思ふんです。チャンネルは出来るだけ多くあつた方がいいと。例えばマンハッタンテレビなど、確か、六十チャンネル以上あります。勿論、チャンネルの中には既存の既設局の電波も全部入ってます。日本の場合でも、吉兼さんの所のご計画の中にも、既設の局、それからCNN、その他、色々入って、大体、30チャンネル位で、準備をされる様にお聞きしていますが、30が60になり、あるいは百になることも可能です。しかしそれだけのチャンネルが果して見られるのか。私はこれからは、社会生活を営む為の、いろんな総合的な情報は、これは例えば、今までの地上局からのニュースはCATVを通して流され、それ以外の細かい情報、そういうものは、恐らく、先程ふれましたCSと、殊にCATVを通して得るようになる。そういう役割を担うのではないかと私は思っています。

アメリカの場合ですが、ニューヨークからコネティカットに移った人々が、まずここにはCATVが入ってるかどうなと見たと、マンシオンやアパートを選ぶそうです。というのは、いままで60以上のチャンネルのある所から、ぼんとわずか、10位のチャンネルしかないところに移ると淋しいらしいのです。チャカチャカ、チャカチャカ、チャンネルを廻して自分の好み、あるいはニーズに答えるもの、そういうものを自分が選択出来る。その中にはいままで既設局のニュース・番組といったいわばマスコミの内容のものもあれば、特殊ないわゆるミニコミのものもある。例えば、すでにCSなんかは、いわゆる塾、河合塾とか、ああいう所がもうすでに、



チャンネルをいくつか取って、全国的にやろうとしますし、それからいろいろな数多い趣味なんかのチャンネルも、成り立ち得ると私は思います。

こういう形で、殊に都市型のテレビはどんどん増えてゆくのではないかと思つてます。ただ、一番問題は工事の問題です。加入する場合の多摩テレビさん、吉兼さんの所なんか、非常に面白いのは、多摩ニュータウンという集合住宅を持つてるので、これはいとも簡単にやれる。いとも簡単というと申し訳ないが、やれるのではないかと思つています。従つてスタートしたら、一番ペイラインに達するのが早いのはここだと思つています。いい所をおやりになつたと感心していません。

実は日本テレビなんかは、自分とこの所在地が、千代田区ですから、一番先に申請をしました。それが何年経ちますか、投資家も全部集めました。未だに全く進んでいません。というのはそこは、全部電線が地下にあるのです。いわゆる東京電力の線を利用しようというのが、我々の考えなのですが、全部地下では、これを掘り起してやるなんてのは、到底考えられません。莫大な経費がかかるからです。それに較べると東京ケーブル、文京区で始めた、東京ドームを中心とするCATV。ここなどは全部、電線が上にあるものですから、それを東京電力の下請け会社に頼んで工事をやつてもらつてるので非常にやり易いのです。この頃は千代田区までのびて来ます。千代田区の神田あたりは、架線があるためです。千代田区は侵蝕されつつあるといえま

す。だから何とか千代田CATVも早くしろというんですが、東京電力さんもいずれは地下電線も光ファイバーに変える時が来る、それまで待たなければ……しかしそうなれば、グンとのびてゆくと思います。いずれにせよ、CATVは、今後、非常に有望だと思います。

このようにニューメディアがどんどん出て来る。我々はどうやって生き残るのかというのが既設局の最大の悩みです。はっきり言いますと、大体、全体の今のシェアから60%位になってしまおうだろうと予想されています。営業の収入にしても、40%は、いわゆるニューメディアの方に流れてゆくだろうと。従って、21世紀になったらその頃は、私なんかはおりませんが、後輩のことを考えますと、何とかしてやらなければならぬ。従ってやはり我々も出来るだけこれらのニューメディアに参入して行くべきだ。そう考えています。これらニューメディアとの勝負というのは、時間のとり合いだといういい方もしております。有限の24時間の時間の中で、テレビを見る可能性のある時間は、そのうちの八時間、本当は大体、平均しますと、主婦が見ますから、大体五時間余りです。ところがビデオが発達してビデオで撮って、それをリアルタイム以外の時間で見たりなんかすると、そちらの方にも既存局をみる時間がとられる。年毎にまた、CATVには我々既存局の番組も流してもらっているが、やはり30チャンネル以上もあると、どうしてもその加入地域での既存局チャンネル視聴率は下ります。それに星からくる波の影響……既存局としては深刻な問題です。ただ何と言っても40年のキャリアがあるんで、ソフトを作るのは、我々が一

番練熟しています。だから、ソフトは出来るだけ作る。勿論、ニューメディアの為のソフト供給会社といえますか、そういうプロダクション、そういうものが恐らくどんどん出来てくるでしょう。アメリカを例にとりますと、HBOとか、音楽専門のMTVとか、スポーツ専門のものとか。そういうものが、盛況になっています。アメリカも完全に三大ネットワークがニューメディア、特にCATVの盛況に押されています。

例えばNBCなどは最近アジアの支局、あるいは特派員、そういうものを減らそうとしてるんです。それだけ苦しくなっている。その分を日本テレビさんみてくれませんかと頼んで来ています。私共とNBCとは協定結んでるものですから。しかし日本テレビで見るといっても、アジア全部を引き受けるなどしたら大変ですので、その辺はまだ話はついていませんが、それにアメリカでのネットワークには如実に、ニューメディアの影響が出ています。それと同じようなことが、いずれ我々の所にも起こって来るだろうと思われます。シェアが減る。収入が減る。そうすると番組制作費を削らざるを得なくなる。そうすると、確実に作品の質が落ちる。そうするとまさしく悪貨は良貨を駆逐する。ぐんぐん質が落ちてゆき、却って収入を減らして行く。それではどうしたらよいか、というのが、一番、我々の悩みです。そこで先刻いしましたようにむしろニューメディアの経営の中に参入し、ソフトを積極的に作り、既存局でのシェアの減をニューメディアの増で補おうという考えなのです。

昨年、秋どもは全社を挙げて、世界陸上というのをやりました。スポンサーもよく協力してくれましたし、視聴率も非常によかった。しかし、少なくともありました収支はマイナスでした。でも将来も考えた上での決断でした。この放送権をにぎっておけば、我々も放送すると同時に、CATVにも流す、或いは他のメディアにも流すという風な形がとれるのです。また、私どもの悩みの中に巨人軍のゲームを途中で切ることがしばしばあります。これは一番お叱りが多い。所が我々は、ナイター後に別の番組を組んでいます。それには別のスポンサーがついており、また野球ファン以外の特に女性ですが、別の視聴者がついています。それらの方面からはやはり、きっちり時間を守ってほしい。守ってくれないと困る。従って時間をおしてナイターをつづけると猛烈なクレームがつけられます。そこで止むなく三十分は野球放送を延長するが、そこで次の番組に切り換えざるを得ないのです。

ところがNHKはすでに地上波の二チャンネルあわせてテレビ四波を持っている。従って御存知の通り、スポーツ中継、一番よい例は高校野球、あれなどは適当に地上波の①から③チャンネルに移し変えながら放送しています。そしてBSで、途中で切るなどということは全くなく初めから終りまで放送しているウインブルドンに若い連中を引きつけ、いまやBS受像機は一千万台になっていきます。

21世紀になると、二千万台には必ずなる。二千万台になると、それは相当な脅威です。だから

我々としてもBS-1放送衛星を、どうしても一チャンネルは獲得したい。そして地上放送の出来ない放送をやりたい。やるべきだということになるのです。その為には郵政からの要請があるミューズ方式のハイビジョンの実験放送にも協力しましょうと、いまこれに協力しているのが、既存のテレビ界の姿です。まあ、いろんな点で今後皆さんのご協力を賜わろうお願いすることがあるかもしれませんが、是非よろしくお願いします。

とりとめのないことをお話し申し上げましたが、このように媒体が増えて来ると益々問題になり易いのは著作権、肖像権などの問題と報道内容へのクレームです。現在、日本テレビにも数々の系争中の件がありますが、最近の例をあげますと、自民党の亀井代議士から訴訟を起こされました。佐川急便から十億円流れた。その中に入って一億もらったというのを、うちが報道しました。そうしたら事実無根で名誉毀損だと、一千万円の損害賠償金をよこせという訴えです。私共の取材したスタッフは、それが事実であるとの証人がいるといますが、裁判になつてその人物を、証言台に立てるわけにはいきません。絶対取材源をもらすわけにはいかないからです。これはマスコミの鉄則です。しかしその時の裁判官の心証は、証人が出るか出ないかで、全然違えます。そうすると、下手をすると敗訴になる、そうするとお詫びと一千万円取られる。

鉄則は守らなければいけない。こういう問題がニューメディアによって媒体が拡がると、今迄以上に度々起こる可能性があると思います。

それから大騒ぎを起こす所謂「やらせ」の問題には、いままで以上に注意しなければならないと思います。先も申しましたプロダクションが沢山おりまして、今、我々のスタッフだけで番組を作っているパーセンテージは、せいぜい30%位で、後は全部、下請のプロダクションに結局やらせざるを得ないので。そういうところから、いろいろ問題が起るのです。余程、腹をすえて嚴重に監視し、徹底指示をやらなければならぬ。さもないと、どうしてもその辺から、落ちこぼれが出て来るのです。とにかく絶えず頭を悩ましながら、どうやってサバイバルして行くかを考えて行く運命にあります。

そしてこの前にはエルメスのファッションショーに立ち会い、その前日は、展覧会のオープニング、その前の日は音楽会の立ち会い、それからスポーツとなると、ゴルフの賞金を出しに行ったり、バレーボールの観戦をしたり……これも、そういうあらゆる方面でのエンタテイメントを供給し、ニュースを伝えるという宿命的メディアアマンであると、しみじみ感じる時があります。以上、ざっぱくな雑談で終らせて頂きます。

(日本テレビ放送網株式会社代表取締役副会長)